

取香の三番叟（千葉県指定無形民俗文化財）

取香の人々が1年で最も燃える日

4月の第1日曜日（平成10年までは4月3日であった）に行われる取香の三番叟は、側高神社の花見法楽に奉納される郷土民俗芸能です。三番叟は式三番ともいわれ、笛・小鼓・大鼓の伴奏に合わせ、翁・千歳・三番叟の三翁による五穀豊穡を祈った舞です。

この三番叟は、どこからどのようにして伝わったのか、いつ頃から行われているものかを示す資料が残されていません。しかし、お面を入れてある箱の裏に「下総埴生郡 取香邑 若者世話人 茂吉



人々の幸福と五穀豊穡を祈る舞（写真は三翁の中の翁）

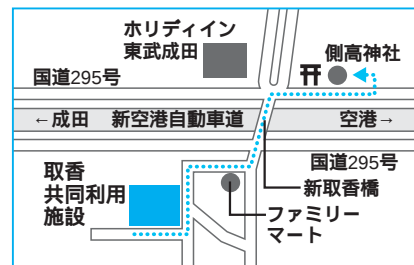


160年の伝統を今に伝える舞（写真は三翁の中の三番叟）

佐市 天保十一年（1840）庚子三月 大工林蔵」と記されており、今から約160年前には取香地区に伝えられ演じられていたことが推定できます。

祭りの当日は、取香共同利用施設（旧円勝寺）に集合し、衣装を整えて側高神社へ向けて出発します。行列は万灯振り2人を先頭に、道中では佐原囃子が演奏されます。神社での神事が済むと、拝殿で三番叟の舞が奉納されます。この三番叟の特色は舞手の足の動きにあります。動きが大きく軽快で躍動感溢れる舞です。

高速道路の建設、側高神社の移転などで一時中止されていましたが、藤崎定雄さんの呼びかけで昭和49年に保存会が結成されました。平成12年には全国民俗芸能大会で披露し全国にその名を広めました。現在取香地区の戸数はわずか25戸で、保存会のメンバーは18人。160年以上も地域の郷土芸能として伝承され、取香の人々が熱い想いで演じる三番叟は、ことしも4月7日に行われます。



編集後記

外国人にとっても住みやすいまちにしようと、開催された外国人懇談会。今回で5回目となりました。この中で、中・高校生のスカートの長さや髪のが話題になりました。「日本の将来が心配」「細かく決められているから反発する」「学力の低下につながる」「気にすることはない」「勉強とは関係ない」な

ど意見はさまざまでしたが、だれもが気になることだったようで、会場は大いに盛り上がりました。個性の尊重とかファッションの自由化などといわれていますが、周囲の人たちに好感をもたれてこそ、センスが光るというもの。もう一度、ファッションの原点を見つめてみるのが大切なのでは。